

事後評価報告書

1. 基本情報

実行団体名	特定非営利活動法人 かしわのもり
実行団体事業名	ここから実験室
資金分配団体名	一般社団法人 北海道総合研究調査会
資金分配団体事業名	2019年休眠預金活動事業
事業の種類	草の根活動支援事業
実施期間	2020年4月～2023年3月
事業対象地域	鹿追町

2. 事業概要

(1) 事業によって解決を目指す社会課題

少子高齢化が進む中、地域で子供たちを育てようとしているが、その中に馴染めない親子の存在がある。特に年長から小学校低学年に関しては社会に参加する場も少ないのが現状である。地域のかげがえのない親子たちの活動や居場所作り、そんな子供たちを見守ってくださる地域のボランティア「ここから隊」と銘打ち、様々な活動を通して顔の見える関係性作りを目指しています。2022年からは親子たちが集まりやすく気兼ねなく集える場所の整備が始まりました。この活動の巣としての役割を担い、飛び立つ子供たちを応援していくことができる事業に成長しています。

【想定した直接的対象グループ】

鹿追町の児童（年長児から小学3年生）およびカフェ参加者

(2) 事業の概要 *①～④が1ページに収まるように記載

<p>①中長期アウトカム 鹿追町の子ども達が、安心して社会性を育むことのできる地域・社会</p>																		
<p>②短期アウトカム 其々の子どもの喜怒哀楽・感情表現を尊重し、地域の人々との関係性の中で表現力・社会性を養うことができる。 鹿追町内で「ここから隊」が活動・活躍する場が広がる。 子育ての先輩や地域の人との交流を通じて、お母さん自身が将来の不安ばかりでなく、目の前の子どもとのやり取りを楽しむ事ができる。 子育て以外の時間を持つ事ができ、同世代異世代交流を通して、鹿追町で安心して暮らすことができる。</p>																		
<p>③実施した活動</p> <p>【ここから実験室】</p> <table><tr><td>2020年度</td><td>5回開催</td><td>延べ参加人数：こども 93名 大人 50名 スタッフ 20名</td></tr><tr><td>2021年度</td><td>6回開催</td><td>延べ参加人数：こども 136名 大人 66名 スタッフ 24名</td></tr><tr><td>2022年度</td><td>7回開催</td><td>延べ参加人数：こども 108名 大人 105名 スタッフ 28名</td></tr></table> <p>【ここからカフェ】</p> <table><tr><td>2020年度</td><td>8回開催</td><td>延べ参加人数：32名 (内：スタッフ 24名)</td></tr><tr><td>2021年度</td><td>2回開催</td><td>延べ参加人数：36名 (内：スタッフ 12名)</td></tr><tr><td>2022年度</td><td>9回開催</td><td>延べ参加人数：100名 (内：スタッフ 30名)</td></tr></table>	2020年度	5回開催	延べ参加人数：こども 93名 大人 50名 スタッフ 20名	2021年度	6回開催	延べ参加人数：こども 136名 大人 66名 スタッフ 24名	2022年度	7回開催	延べ参加人数：こども 108名 大人 105名 スタッフ 28名	2020年度	8回開催	延べ参加人数：32名 (内：スタッフ 24名)	2021年度	2回開催	延べ参加人数：36名 (内：スタッフ 12名)	2022年度	9回開催	延べ参加人数：100名 (内：スタッフ 30名)
2020年度	5回開催	延べ参加人数：こども 93名 大人 50名 スタッフ 20名																
2021年度	6回開催	延べ参加人数：こども 136名 大人 66名 スタッフ 24名																
2022年度	7回開催	延べ参加人数：こども 108名 大人 105名 スタッフ 28名																
2020年度	8回開催	延べ参加人数：32名 (内：スタッフ 24名)																
2021年度	2回開催	延べ参加人数：36名 (内：スタッフ 12名)																
2022年度	9回開催	延べ参加人数：100名 (内：スタッフ 30名)																
<p>④出口戦略</p> <p>調査Ⅰ【子ども向けプログラムのデザイン】</p> <ul style="list-style-type: none">・子どもの喜怒哀楽・感情表現を尊重したプログラム・地域の人々との関係性の中から表現力・社会性を養うプログラム <p>調査Ⅱ【ここから隊の活躍の場のデザイン】</p> <ul style="list-style-type: none">・鹿追町内で活動・活躍する場を増やす <p>調査Ⅲ【行政との連携】</p> <ul style="list-style-type: none">・将来の不安より、目の前の子どもとのやり取りを楽しむ事ができる。・子育て以外の時間を持つ事ができる。・同世代異世代交流を通して、鹿追町で安心して暮らすことができる。 <p>調査Ⅳ【保護者のQOLの向上】</p> <ul style="list-style-type: none">・子育ての以外の時間をもつことができる・同世代・異世代交流ができる・新たなつながりができ、鹿追で安心して暮らすことができる。 <p>調査Ⅴ【活動の拠点づくり】</p> <ul style="list-style-type: none">・レンガの家プロジェクトとして、地域に拠点となる場をつくる。・参加型ワークショップやオンラインでのつながりの場や機会をつくり、機能させることができる																		

3. 事後評価実施概要

(1) 実施概要

①この事業の重要なポイントとして設定した変化

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・子どもと地域のつながりをつくる・ありのままを受けとめ、ふりかえる・子どもの変化によって、保護者も変化するきっかけをつくる |
|---|

②事後評価のための実施した調査

調査 I	【関連する短期アウトカム】 1. 各々の子どもの喜怒哀楽・感情表現を尊重し、地域の人との関係性の中で表現力・社会性を養うことができる
	1) 調査及び分析方法：事業毎の振り返りシート・年間を通じての感想
	2) 実施時期 2020年 月～2022年11月
	3) 対象者：実験室に参加してくれた子ども達延べ65名
	4) 結果（明らかになったこと） ①素のままの感情を受けとめ、臨機応変に対応する ・「自分はこうしたい」という意思や「やりたくない」「不安」「つまらない」という感情も受け止める事で、安心して過ごせる場となった。 ・臨機応変に大人が対応する事により、その子がどんな事に興味を持ち、どんな方法で自分らしさを表現するのかを知る時間となった。 ②来年が楽しみになる活動 ・年間を通じて参加した子どもからの感想は、「最後の1年だったから思い切り楽しんだ！むずかしい事などもみんなで出来て良かった」「初めてカヌーに乗ってたのしかった」「1年間とても楽しかったです。あと1年できるので来年も楽しみにしています」等の言葉が寄せられた。 ③ふりかえる時間をつくる ・子どもたちは、振り返りシートの提出を通して、初年度は中々表現出来なかった気持ちを表出してくれる子が増えていった。 ・最初は振り返りシートを全く提出しない子どもも回数を重ねることでふりかえりを描いてくれようになった子どももいた。 ・絵での表現が多かった子どもが、2年3年と活動をしていく中で、言葉での表現が増えていき、その子の成長していく様子を近くで見守る事に喜びを感じた。 ④開催回数を重ねてつながりをつくる ・実験室以外の場所で会った時にも、「今度いつ実験室やるの？」「あ、いつも実験室で同じバナナグループだもね！」等の言葉掛けや会話をする関係性に発展した。 ・回数を重ねるほど、スタッフ、ボランティアとのコミュニケーションでは、プログラム作りで本音で話す場面も多くなり、ここから実験室で大切にしている理念の共有等の広がりが生まれた。 ⑤保護者の意識の変化 ・「色々な事を自由にさせてくれる事で、居心地が良いみたいです」「学校の宿題には取り掛からないのに、振り返りシートだけは直ぐに描くんですよ～」と受付時に嬉しそうに提出して下さる保護者もいた。

調査Ⅱ	【関連する短期アウトカム】 鹿追町内で「ここから隊」が活動・活躍する場が広がる
1) 調査及び分析方法：関係者インタビュー	
2) 実施時期：令和4年11月22日（火）	
3) 対象者：ここから隊	
4) 結果（明らかになったこと）	
①子どもに寄り添う	
<ul style="list-style-type: none"> ・「自分と子どものちがいを大切にし、子どもの性格にあわせた声掛けが出来たと感じました」等、愛情深く子どもたちを見守る活動に取り組んでいる。 ・身近で出来る豊かな体験を、自然に伝えられる豊富な知識や経験によって、子どもたちへ深みのある関わりとなっている。 	
②活動日以外でもつながる	
<ul style="list-style-type: none"> ・実験室以外の場所で「あ、実験室の人だ!」「同じグループだよね」等、子どもたちからの声掛けでの共通の話題が生まれている。 	
③ここから隊、ボランティアスタッフ、実験室スタッフのモチベーションの維持（ここから隊）	
<ul style="list-style-type: none"> ・子どもとの関わりの増加、「自分も楽しまなくちゃ参加出来ないよ～」と活動内容や回数等大変な時こそ、自分たちも楽しんでいる姿があった。 ・子どもたちの笑顔が一番の活動への源となっている。 ・「どれをとっても、子どもにとって無駄な事はない」子どもたちが地域とつながる、自分の町を知る、「自分の町の事をどんどん知って欲しいよね、そのお手伝いをしている」継承していく事の大切さを実感している。 	
(ボランティアスタッフ)	
<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアスタッフは「通年で参加する事で、安心して子どもの成長を見守る事が出来て、自分自身の学びにもなりました」等の感想があった。 ・「子どもたちが、自分たちの事を覚えていてくれると嬉しくなります」と、高校生ボランティアさんからの純粋な感想から、同じ空間でしか味わえない温かい経験の大切さを意識させてくれた。 	
(実験室スタッフ)	
<ul style="list-style-type: none"> ・長年鹿追在住のここから隊メンバーが複数おり、実験室スタッフとボランティアスタッフ共に心強い。 ・ここから隊は70代が多く「もう、子どもについて歩くのが精一杯、体力的にもそろそろ限界かな（苦笑）」という意見もあり、体力面に配慮した運営方法の検討や当日運営の工夫が必要となっている。 	

調査Ⅲ	【関連する短期アウトカム】 鹿追町内で「ここから隊」が活動・活躍する場が広がる
1) 調査及び分析方法：アンケート	
2) 実施時期：令和4年11月1日～11月16日	
3) 対象者：ここから実験室に協力くださった行政および関係者	
4) 結果（明らかになったこと）	
①意識の変化	
<ul style="list-style-type: none"> ・「身近な何気ないこと見過ごしがちなことを一つ一つ丁寧に拾い上げ、大事なこと大切なこと、喜怒哀楽を引き出している事に感激」、「子どもたちも保護者の方も楽しみに来ているんだなと伝わりました」等、実験室の目指している事への理解を深め、関心を高めて頂けたと感じた。 ・「少しだけ高めの目標への挑戦等があると、更に良い成長が期待できる」等、子どもたちが普段出来ない経験をする場への関心の高さが伺え、実験室の活動をより良いものへと期待される気持ちを感じた。 	
②協力者の増加	
「次年度、鹿追町子ども会と何か一緒に活動出来る機会があればと思っています。またお手伝い出来る事があれば声を掛けて下さい！」等、実際に協力し合う事で、今後に向けて継続的に繋がり、正式なコラボ企画実施の方向性が見えてきた。	
③行政との連携強化	
・「各部の活動や町民主体の活動。今後の継続的に一緒に活動出来る様、行政としても体制を整えたいと思います」という言葉から、3年という時間の中で、実験室に対して何となくぼんやりしたイメージから、少し輪郭がくっきりとしたものへと認識の変化を感じられる。	

調査Ⅳ	【関連する短期アウトカム】 子育て以外の時間を持つことができ、同世代異世代交流を通して、鹿追町で安心して暮らすことができる（保護者のQOLの向上）。
1) 調査及び分析方法：アンケート	
2) 実施時期 2020年12月～2023年1月	
3) 対象者：ここから実験室に参加してくださった保護者	
4) 結果（明らかになったこと）	
①意識の変化	
<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが毎回の活動を楽しみにしている様子や、知っている大人やお友達が増えた事で、より安心して実験室に通えているという意見をたくさん頂いた。 ・子どもが安心、安全に過ごせる場所がある事が、何より保護者が安心して暮らせる事にも繋がるという事を認識した。 ・「それぞれの個性に対応出来る社会に」「子どもが夢を持って進むために、寄り添い前向きに考えてくれる社会になってほしい」等、今より少し未来を見据えた思いが芽生えている。 ・「今後も鹿追だから出来る活動を」「自然の中での遊びを」等、鹿追町という恵まれた自然豊かな土地で育っていく事の大切さや、この町で育つ事の意味を、皆さんが考えられている。 ・コロナ禍の開催となり、対面での保護者間の交流の場を難しく、今後の課題となった。 	

調査Ⅴ	<p style="text-align: center;">【関連する短期アウトカム】</p> <p>子育ての先輩や地域の人との交流を通じて、お母さん自身が将来の不安ばかりでなく、目の前の子どもとのやり取りを楽しむことができる。</p>
1) 調査及び分析方法： 関係者インタビュー	
2) 実施時期：2023年1月22日 15:30~16:30	
3) 対象者 ここからカフェに参加した方	
<p>4) 結果（明らかになったこと）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・参加者各々が自由に発言されていたのは、かしのもりとの日常的なつながりが構築されているためである。地域で20年活動してきた実績により、町民とは関係性が構築されている。 ・公共事業や行政主体の事業は、肩書のある発言が多く当たり障りのない言動になるが、本事業は民間主体のプロジェクトであるため、自由な雰囲気と言動にいい影響を与えている。 ・年代の違いはあっても、地域の記憶を引き継いでいる感覚がある。 ・地域の特性を分析し紡ぎ出した、あんこ牛乳部・環境整備部・写真部・こども部・お家部などの活動なので、地域の方が興味を持った活動に、自由に参加できる。現在はカフェ参加者があんこ牛乳部の活動に参加しはじめており、本格的な始動につながる可能性があり、今後の可能性を実感している。 	

③調査結果の考察

3年の事業期間、常に新型コロナ感染対策に留意した計画立案、かつ感染の流行に応じた計画の修正変更を余儀なくされた。その中であっても、丁寧な準備を重ねオンラインでのつながりの場や機会をつくった結果、子ども中心の体験型アクティビティの「ここから実験室」、参加型ワークショップの「ここからカフェ」を開催することができた。さらに、地域のボランティア（ここから隊）の力が加わり、それらを機能させることもできた。

子どもたちの何気ない言動を観察し、個々の個性や反応を大切にすること。また、保護者だけでなく、子育ての先輩でもある地域住民や若い世代のボランティアの協力を得ることで、育てられる側・育てる側と区別するものではなく、子どもも大人もともに育ち合う場として機能するということがわかった。

さらに、自由に発言、行動できるコミュニティだという認識の広がりによって、現在は地域住民が集まって活動する場所がないが、設計中の「レンガの家」は、地域住民が気兼ねなく集える場所となる可能性がある。

→レンガの家プロジェクトとして、地域に拠点となる場をつくる。

→拠点となる場ができると、あんこ牛乳部のように、活動に参加するきっかけや活動の拠点となる場所ができるため、多様なつながりが生まれ、活動の継続性が増していく手ごたえがある。

(2) 実施体制

内部/ 外部	評価担当分野	氏名	団体・役職
内部	全体	松山 なつむ	NPO 法人かしわのもり 理事
内部	ここから実験室	亀井 静	NPO 法人かしわのもり
内部	ここからカフェ	伊藤 節子	NPO 法人かしわのもり
外部	全体	高山 大祐	NPO 法人 NPO サポートセンター
外部	全体	西上 ありさ	Studio-L

4. 事業の実績

(1) インプット (主要なものを記載)

①人材 *主に活動した メンバーの数 5人	氏名	主な役割		
	松山 なつむ	事業統括 ここからカフェ		
	伊藤 節子	ここからカフェ		
	亀井 静	ここから実験室		
	高附 孝子	会計・事務局		
平井 啓太	ここから実験室			
②主な資機材	資機材名	用途		
	スピーカーフォン	オンライン会議等		
	ワイヤレス拡声器	屋外活動時		
	プロジェクター	オンライン会議・ワークショップ		
	ラミネーター	イベント時の看板・メニュー表		
③経費実績	契約当初	実績	差額	
	事業費の総額	2,480 千円	2,695 千円	215 千円
	休眠預金からの助成額	2,220 千円	2,220 千円	千円
	自己資金	260 千円	475 千円	215 千円
④本事業に投入した自己資金の種類と金額	名称	金額		
	法人本体からの自己資金	260 千円		
	参加者からの会費	215 千円		
		千円		
		円		
	合計	475 千円		
	*金額が③経費実績の自己資金と一致			
⑤自己資金の資金調達で工夫した点	<p>こどもたちの活動に関しては年会費を頂いております。コロナウイルス感染症が流行し始めた当初は活動出来るかどうかの判断が付かない時期であった為都度の会費を集めました。2年目3年目に関しては出来る事・出来ない事の目途が出来たため従来通りの年会費を頂くことにし、予定通りの資金調達は出来た。</p>			

(2) アウトプットの実績

アウトプット	クック・アート教室（ここから実験室）の開催
1) 指標 開催数/参加者数	
2) 初期値/初期状態 年 4 回/18 人	
3) 目標値/目標状態 年 5 回/30 人	
4) 目標達成時期*事業計画書に記載した時期 2022 年 3 月	
5) 実績値 ・2020 年（5 回開催）6 月/17 名・7 月/22 名・8 月/20 名・9 月/18 名・10 月/16 名 ・2021 年（6 回開催）5 月（オンライン）/22 名・6 月（オンライン）/23 名 7 月/22 名・9 月/24 名・10 月/20 名・11 月/20 名 ・2022 年（7 回開催）5 月/16 名・6 月/16 名・8 月/17 名・9 月/12 名・10 月/16 名、 14 名・11 月/17 名	

アウトプット	ここから実験室のボランティア「ここから隊」が年代を問わず増える
1) 指標 子どもボランティアの数・大人ボランティアの数	
2) 初期値/初期状態 子どもボランティア：0 人/大人ボランティア 5 人	
3) 目標値/目標状態 子どもボランティア 10 人/大人ボランティア 10 人	
4) 目標達成時期*事業計画書に記載した時期 2022 年 3 月	
5) 実績値 ・2020 年 大人ボランティア 10 名/子どもボランティア（高校生）2 名 ・2021 年 大人ボランティア 11 名/子どもボランティア（高校生）2 名 ・2022 年 大人ボランティア 15 名/子どもボランティア（高校生）5 名	

アウトプット	ここからカフェの実施
1) 指標 開催数/参加者数	
2) 初期値/初期状態 年 0 回/0 人	
3) 目標値/目標状態 年 3 回/10 人	
4) 目標達成時期*事業計画書に記載した時期 2022 年 3 月	
5) 実績値 2020 年度 8 回 延べ参加人数：32 名（内：スタッフ 24 名） 2021 年度 2 回 延べ参加人数：36 名（内：スタッフ 12 名） 2022 年度 9 回 延べ参加人数：100 名（内：スタッフ 30 名）	

アウトプット	感染症対策の実施
1) 指標	個別具体的な感染対策の効果と結果
2) 初期値/初期状態	参加者の中で感染症罹患者 0 人
3) 目標値/目標状態	参加者の中で感染症罹患者 0 人
4) 目標達成時期*事業計画書に記載した時期	2021 年 3 月
5) 実績値	<p>①新型コロナ感染症対策として感染状況に応じた開催方法を選択する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・感染流行期：オンライン開催 ・感染下火の収束期：リアル開催 <p>②実施前の検温とアルコール消毒の徹底</p> <p>③リアル開催も段階的に</p> <ul style="list-style-type: none"> ・できる限り屋外で実施 ・屋内の場合は定員を抑え ・3密を徹底して避ける <p>④その時々に応じた新型コロナ感染症の情報を収集し、判断迷った時には複数の関係者で検討、相談</p> <p>⑤その他</p> <p>以上の様な項目を実施し、今回の事業に関連しての感染者の発生は無く、無事に事業を終えることができました。</p>

(3) 外部との連携の実績

<p>事業開始当初から、鹿追町の各関係課（保健福祉課・子育て支援課・学校教育課・農業振興課・鹿追消防署）や子どもに関連する地域の事業所（然別湖ネイチャーセンター）との連携を図ることは念頭に、事業の前後の説明や、協力要請を継続した。その結果、毎年度のコラボ企画や場の提供に協力いただき、スタッフの励みとなったことはもちろん、費用面でも抑えることができた。</p> <p>事業を継続し実績を伝える中で、コミュニケーションを図り、新しいアイデアにつながることもあり、継続していくことでさらに連携が深まると感じている。</p>

5. アウトカムの分析

(1) アウトカムの達成度

①短期アウトカムの計画と実績

短期アウトカム	各々の子どもの喜怒哀楽・感情表現を尊重し、地域の人との関係性の中で表現力・社会性を養うことができる。
1) 指標	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの感情の起伏・凸凹の変化 ・事業毎の振り返りシート ・年間を通じての感想
2) 初期値/初期状態	<ul style="list-style-type: none"> ・自身の思いを表現するのが苦手 ・マイナスイメージの感情を表現することに慣れていない
3) 目標値/目標状態	<p>目標【子ども向けプログラムのデザイン】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの喜怒哀楽・感情表現を尊重したプログラムづくり ・地域の人々との関係性の中から表現力・社会性を養うプログラムづくり <p>状態:子どもの感情の変化を振り返りシートやインタビューで大人が把握して、良くも悪くも変化に寄り添い、継続して参加できる。</p>
4) 目標達成時期	2022年3月
5) アウトカム発現状況(実績)	<p>現在のプログラムは、上記2つの目標を盛り込んであり、おおむね目標を達成している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ①素のままの感情を受けとめ、臨機応変に対応できる ②来年が楽しみになる活動に成長させた ③ふりかえる時間の重要性の認識がアップ ④開催回数を重ねてつながりを広めた ⑤保護者の意識が変化した
6) 事前評価時の短期アウトカム	変更なし

短期アウトカム	1. 鹿追町内で「ここから隊」が活動・活躍する場が広がる。
1) 指標	<ul style="list-style-type: none"> ・ここから隊自身が楽しんで参加できているか ・ここから隊の自主的な活動や企画の提案・意見が活発に出される
2) 初期値/初期状態	<ul style="list-style-type: none"> ・毎回の行事の満足度や達成化は不明 ・提案には協力的であるが、積極的に発案・意見を出すことは遠慮がち
3) 目標値/目標状態	<p>目標【ここから隊の活躍の場のデザイン】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鹿追町内で活動・活躍する場を増やす <p>状態:参加・お手伝いくださっているここから隊の表情が生き活きとし、誰にも遠慮せずにやってみたいことを表現できる。</p>
4) 目標達成時期	2022年3月

<p>5) アウトカム発現状況 (実績)</p> <p>ここから隊の活躍の場が日常にも拡大し、子どもに寄り添う存在となっている。一方で次年度以降は運営側の課題があるため継続して運営できるプログラムとなるよう工夫が必要となっている。</p> <p>①子どもに寄り添う活動 (根拠数値あれば)</p> <p>②活動日以外でもつながりをつくる (根拠数値あれば)</p> <p>③ここから隊、ボランティアスタッフ、実験室スタッフのモチベーションの維持のための工夫が課題 (根拠数値あれば)</p>
<p>6) 事前評価時の短期アウトカム 変更なし</p>

<p>短期アウトカム</p>	<p>子育ての先輩や地域の人との交流を通じて、お母さん自身が将来の不安ばかりでなく、目の前の子どもとのやり取りを楽しむことができる。</p>
<p>1) 指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お母さんの心理的な変化 ・一人ひとりでは解決できないことも、少人数での対話で不安を表出できる 	
<p>2) 初期値/初期状態</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リアルに対面で話をする機会が少ないまたは避けている ・核家族などで異世代や地域との交流する場が少ない ・日々のちょっとした不安を口にすることに慣れていない 	
<p>3) 目標値/目標状態</p> <p>目標【保護者のQOLの向上】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子育ての以外の時間をもつことができる ・同世代・異世代交流ができる ・新たなつながりができ、鹿追で安心して暮らすことができる。 <p>状況：不安なく子育てできる (当事者)</p> <p>他の保護者の子育ての悩みに関心を持ち、助言する姿勢が観察される (同世代間・多世代間)</p> <p>子育てに関する悩みを、地域全体の課題として捉える (課題の社会化)</p>	
<p>4) 目標達成時期 2022年3月</p>	
<p>5) アウトカム発現状況 (実績)</p> <p>保護者は、子どもを通じて意識の変化が起こっている。また地域に協力者が増えていることも実感している。</p> <p>①意識の変化</p> <p>②協力者の増加</p> <p>③行政との連携強化</p>	
<p>6) 事前評価時の短期アウトカム 変更なし</p>	

短期アウトカム	子育て以外の時間を持つことができ、同世代異世代交流を通して、鹿追町で安心して暮らすことができる。
1) 指標	<ul style="list-style-type: none"> ・お母さんの心理的な変化 ・子育て世代を卒業した先輩の心理的な変化
2) 初期値/初期状態	・就労の有無に関わらず、母親以外の時間を確保することが難しい
3) 目標値/目標状態	<p>目標【行政との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・将来の不安より、目の前の子どもとのやり取りを楽しむ事ができる。 ・子育て以外の時間を持つ事ができる。 ・同世代異世代交流を通して、鹿追町で安心して暮らすことができる。 <p>状況：子育て以外の地域活動に参加する意欲が持てる。</p>
4) 目標達成時期	2022年3月
5) アウトカム発現状況（実績）	保護者自身が自分をいたわる時間を持ち、異世代交流から安心できるつながりを少しずつふやしている。コロナ禍では保護者間の交流の場の開催が難しく、今後の課題となった。
6 意識の変化	
6) 事前評価時の短期アウトカム	変更なし

②アウトカム達成度についての評価

<p>【4つの短期アウトカムの総合的評価として】</p> <p>コロナ禍の3年間の事業となり、紆余曲折で波乱の連続であったが、多くの方の協力と、何より子ども達の様々な反応に励まされ、工夫を重ねて活動を休止せずに開催できたことは大きな評価と考える。</p> <p>この活動実績が基盤となり、緩やかにではあるが地域関係者への認知され、行政の協力を継続して得ることができている。さらに、関係するスタッフの自信・学びへと繋がり、ボランティアのここから隊との対話を重ねるエネルギー源にもなっている。ここから隊や高校生ボランティアの存在は不可欠で、時に迷い・ジレンマ・時間的負担感を感じつつも、最後まで協力してくださったことが今回の成果に寄与している。</p>

(2) 波及効果（想定外、波及的・副次的効果）

<p>本事業を継続するために、地域に活動の拠点作りを模索し、いくつかの助成金を申請した結果、日本財団みらいの福祉施設建築プロジェクト2021に採択され、地域の方々が思い出のある空き家を、「レンガの家プロジェクト」としてリノベーションする資金を得ることができた。現在、子ども達が思い思いに遊び、活動できるランドスケープも含めた設計を進めている段階で、2023年の竣工を目指す煉瓦の家プロジェクトは想定外の波及効果と捉えている。</p> <p>レンガの家は子ども達や孤立するお母さんたちの居場所となり、気兼ねなく集まれる場や機会の提供をめざしている。さらに、高齢者のデイサービスやカフェもある複合施設となる予定で、子どもから高齢者、そして障がいの有無に関わらず、地域の方がごちゃまぜで交流できる「入りやすさ」をコンセプトにしている。本事業の中長期アウトカムである「鹿追町の子ども達が、安心して社会性を育むことのできる地域・社会」から、十勝全域への波及効果も見込まれる。</p>
--

(3) 事業の効率性

- ①インプットの適切性
大きな変更はなく、目的外や過大な支出はなく適切に使用できた。
- ②量的・質的に重要性の高いインプット
本事業では、地域住民、地域の関係機関との連携を重視しプログラムしており、然別湖ネイチャーセンターのアクティビティとのコラボ企画は参加者の満足度も高く、質的に重要なインプットとなっている。
また、3年間の期間を通して、地域分析やワークショップの中で、スタッフ間、ボランティアの方、そして地域住民と対話の繰り返したことで、一連を通して studioL の西上氏のコーディネートを得られたことで、事業全体の質を高めた。
- ③アウトプット・アウトカムと特定されたインプットとの関係性
ここから実験室のプログラムを試行しながら、子ども達、保護者の振り返りやここから隊からの感想・助言を踏まえて、費用対効果を勘案した持続性の高いプログラムを見出すことができた。また、レンガの家プロジェクトが連動するように立ち上げることができた。
- ④考察
休眠預金を活用する事が出来る様になり、ここから実験室の活動の幅が広がり、そこから見えた有効なプログラムで今後も継続をし、事業の質の向上にとつながっている。その結果、地域関係者からの信頼を得ることに繋がり、行政との連携が年々増え、互いに抱える課題や、今後の展望等を対話出来る関係性に発展した。
また、活動を通じて拠点となる場の必要性を強く感じ、レンガの家プロジェクトが始動している。新たな拠点を始動させるにあたり、ゼロイチを伴走してくださったここから隊が、実験室での活動とは違う形で、居場所づくりに貢献して頂ける道筋が生まれた。

6. 成功要因・課題

・成功要因としてはここから隊の活躍があり、元保育士が多数を占めるここから隊の機動力に支えられた。子供たちの活動、ここからカフェへ等幅広く参加いただいた。一方で、ここから隊にはアクティブシニアの方も多く、活動内容に配慮をようする場面もあり、次年度以降は継続して運営できるプログラムとなるよう工夫が必要である。またベテランの経験を引き継ぐ新たなボランティアメンバーの育成が必要である。

・コロナ禍であったが子ども達には ZOOM の活用や屋外での活動をメインにする事で感染者を出さず事なく、ほぼ予定通りの活動が出来た。しかし、コロナ禍では保護者間の交流の場の開催が難しく、今後の課題となった。

7. その他深掘り検証項目（任意）

かしわのもりが本事業に申請した3年前は、ここから実験室をはじめ、既にいくつかの地域活動を実施していた。その頃の課題は活動の評価方法が全くわかっていなかった。「本当にこれで合っているのか」「独りよがりになっていないのか」「継続できるのか」など、様々な不安が常に付きまとっていた。その不安に向き合うためにも「事業の評価」を根本から学びたいという思いで申請し、3年間「評価」とはと常に問いながら、社会的インパクト評価に向き合ってきた。

本事業では、伴走支援としてNPO法人北海道NPOサポートセンターの高山大祐氏、中西希恵氏が、毎月の定例ミーティングおよび節目となる時点での助言およびサポートを頂き、中間評価、事後評価方法においては、HIT主催の研修会でソーシャルフリースの土岐三輪氏からのインプット。さらにはStudio-Lの西上ありさ氏の三年間に渡るきめ細やかなアシストが得ることができた。的を得た水先案内のお陰で、評価のための評価は無意味で、評価の基盤となるのは、日々の活動であることを教えていただいた。

評価を気にしていた頃は、日々の活動に自信を持つことができなかったが、2021の中間評価に向けての土岐氏の研修の中で、「活動を行った直後に生まれるアウトカム（直後のアウトカム）という視点を示された。「直後のアウトカムを言語化することで、活動によっての成果（アウトカム）が生まれるのかを検証しやすくなる。」このストーリー性がかしわのもりの活動と親和性の高さを感じた。ここを起点に、評価にこだわるのではなく、直後のアウトカムを注視して活動を重ねることができた。

活動主体となるかしわのもりの周りを、北海道NPOサポートセンター、土岐氏、西上氏、そしてHITの皆さんが様々な視点で玉ねぎの皮モデルの様に、何重にも包み込んでくださった、そのお陰で年々自信をもって活動することになり、その自信は正当な評価に裏付けされることが腑に落ちて学ぶことができた。

8. 結論

(1) 事業実施のプロセスおよび事業成果の達成度の自己評価

*①・②についてあてはまる状態1箇所ずつ「○」を記入してください

	多くの改善の余地がある	想定した水準までに少し改善点がある	想定した水準にあるが一部改善点がある	想定した水準にある	想定した水準以上にある
①事業実施プロセス			○		
②事業成果の達成度				○	

(2) 事業実施の妥当性

今回の事業の総合的な自己評価としては、課題やニーズの適切性、それに対する事業設計の整合性、実施状況の適切性、成果の達成状況から妥当であり、有効な結果を得られたと考える。

9. 提言

2022年10月1日現在、北海道179市町村の中で、鹿追町の人口は5,266名89番目となっている。人口1万人以下の市町村が7割、鹿追町を含む人口5,000人を割っていく市町村が5割を占める北海道。つまり、鹿追町の人口規模は、道内において珍しくはない。人口減少が進む市町村において、本事業対象者の様に、孤立・子ども・発達障がい等暮らし辛さを抱える少数派の方々への福祉サービスは、「全体の利益」「公共の福祉」の実現を使命とする行政が、積極的に関与することが難しい現状がある。

また、行政の存在が揺らぐことはないが、行政の役割を量的・質的に変化させ、公務労働のあり方も見直されるようになってきている現代において、行政運営においても民間企業と比較して、効率性、機動性、透明性、さらにはサービスの質といった要素が意識されるようになっている。

従来、行政が提供する公共的なサービスとは、非市場性を本質とするものとされ、公共の秩序維持や安全の確保から、福祉サービスなどの各種サービスの供給に至るまで、広範囲な役割を行政が担ってきた。一方で、行政ニーズの多様化・高度化、情報通信革命の進展による、行政と民間の情報格差の縮小などの背景があるとされている。

これらのことを踏まえ、少数派の住民への福祉のあり方を、民間から提言する意味が年々高まっている。まずは民間がサービスを開拓し、持続可能を模索する段階で行政が参画できる仕組み、文化を醸成する必要がある。そこには、少数派への福祉サービスがもたらす波及効果や事業の効率性を民間から行政に発信し、それらを有効な協議の場につなげるには圧倒的な信頼関係が必須である。信頼関係は一朝一夕で出来上がるものではない。地域で活動が続ける民間事業者が質の高いサービスを提供することで、住民との信頼関係を構築し、住民と行政双方から求められる存在となりことが必要と考える。民間のゼロイチのスタートアップ時には、量より質。そして持続可能な道筋を共有できる段階で行政が一体となる。ここまでの本事業3年間の実績から申し上げることのできる提言となる。持続可能な道筋については、引き続きの活動を通して実証していくことになる。

10. 知見・教訓

ボランティアで携わって下さるの方々への打ち合わせや会議は、LINEを活用した。また、互いの理解を深めるために、個別での対話も重ねた。さらに、回数は少ないが一堂に会する機会もつくり、意見や提案を出し合った。手間暇はかかるが、丁寧に打ち合わせや会議を重ねる事で、事業の理念や意図を共有することができた。一方で、ボランティア活動にかける時間的な量は個々に違い、打ち合わせを何度も重ねることが負担になる方もおられた。このことから、ボランティアの方々の立場や事業に参画できる時間はそれぞれに違うことを理解した上で、共有すべき内容に応じた方法や意見交換の場の持ち方に工夫が必要で、それが効果的・合理的であれば、継続した参加へのモチベーションへとつながる。

令和5年度も事業は継続する予定で、本事業から波及したレンガの家プロジェクトの設計がスタートしており、拠点となるレンガの家と融合したプログラムづくりに取り組んでいく。住民の興味や関心が広がる様に、多様なつながりをつくる場の形成を目指していく。日々の「あったらいいのに」「できたらいいのに」という小さな声を拾い集め、対話によって「やってみよう」という意欲につなげ、地域の仲間を集めて実行できる体制を準備する。また、小さな挑戦が自走化できるよう、段階に応じた講座や検討ツールを準備し、情報発信を強化していく。

時代の変化を楽しみながら、柔軟に生きることを選択できる住民の増加が、ここで暮らし続けたいと思う地域づくりにつながっている。

11. 資料（別添）

*添付したものにチェックを付けてください。

	事前評価報告後に見直した事業計画やロジックモデル
	事後評価報告時の事業計画やロジックモデル
レ	事業の様子がわかる写真資料 *公開可能な写真を貼付してください。（肖像権・著作権に十分にご注意ください）
レ	広報活動の成果品、報道された記事
レ	アンケート調査結果や実際に使用した調査票
	とりまとめられた白書
	論文、学会発表資料
	その他（ ）
	その他（ ）